

# 博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

平成 25 年度

京都外国語大学

## はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、平成 26 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	中島 亨輔
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第 12 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 15 日
学位授与の条件	本学学位規程第 3 条 3 号該当
学位論文題目	英語における身体部位表現と姿勢表現の概念研究 －認知言語学的アプローチ－
論文審査委員	主査 教授 赤野 一郎 副査 教授 由井 紀久子 副査 教授 瀬戸 賢一（佛教大学）

## 論文内容の要旨

本論文は、言語化されるものは、客体的な外界ではなく、それが知覚・認識される私たちの心に投影されたものである、したがって言葉の意味というものは外界世界を直接反映したものではなく、認識主体の主體的解釈に基づいているという認知意味論の考え方に立って、「立つ」、「座る」、「横になる」という人間の活動の基本姿勢とそれに関わる身体部位に対する我々の認識の仕方が言語表現にどのように投影され、意味的拡張を起こしているかを、辞書の記述と用例および映画のシナリオを言語データとして分析しようとしたものである。

本論文の構成は以下の通りである。

### 序論

- 第 1 章 先行研究
- 第 2 章 「立姿勢」に対する認識と言語表現
- 第 3 章 「座姿勢」に対する人間の認識
- 第 4 章 「横臥姿勢」に対する人間の認識
- 第 5 章 姿勢変化の順序と言語表現との繋がり
- 第 6 章 手指の機能に対する人間の認識
- 第 7 章 抵抗封じの姿勢
- 第 8 章 「名前」に対する人間の認識

### 結論

序論において、本論文の目的が「我々人間が認識の主体となる自身を如何に認識し、それをどのように言語に反映させているかを明らかにすること」であることを示し、人間の言語活動の根底にある人間自身に対する捉え方を分析することの意義を述べている。

第 1 章において、本論文のテーマである身体部位表現・姿勢表現に関わる 5 つの文献、方向性のメタファーが人間の身体性の基盤になっていることを論じた **Lakoff and Johnson**(1980)、姿勢に関わる「直」概念を論じた上野(2002)、「身体性」を論じた **Rohere**(2007)、身体部位「足」に関するトルコ語・日本

語を比較した Aksan(2011)、日本語の「腹」と「腰」の分析である Nagai and Hiraga(2011)を概観し、本論文との関連性を述べている。

第2章は、人間の日常生活における3つの基本姿勢、「立姿勢」、「座姿勢」、「横臥姿勢」のうち「立姿勢」を基本的姿勢と位置づけ、立姿勢動詞(*stand*)とそれに関わる身体部位語(*foot, leg, spine*)を含む表現を取り上げ、日本語との比較において、我々の認識のあり方を探っている。

第3章では「座姿勢」を休息をとる姿勢であり、非活動姿勢と捉え、*stand by* と *sit by* および *sit through* と *sit out* の意味的比較を行っている。

第4章では「横臥姿勢」をとりあげ、それとの関係において「睡眠」と「死」、およびそれらと関連する「下方向」にまつわる表現を分析し、日本語との比較において、我々の認識方法を探る。

第5章では姿勢の変化を表す、*stand up, stand down, sit down, sit up* を取り上げ、*stand, sit* と結合する *down* と *up* のそれぞれの意味的機能を分析している。

第6章では、手と足を道具としての身体部位と位置づけ、それぞれの機能と指の呼び方との関係性について日英における比較分析を行っている。

第7章では、人間が自由を奪われた非日常的な姿勢を表す語、*reach, freeze, root* の原義からの意味拡張について論じている。

第8章では、名前に対する人間の認識のあり方をさぐり、「名前は着せるもの」というメタファーと仮定し、*name*、「名前」とその関連表現を分析する。

結論において「我々は無意識的に各身体部位を用い、また姿勢変化を行い生活しており、その無意識的意識を様々な形で言語に反映させていることを、本論文では証明することができた」と述べ、本論文を終えている。

## 口述試問及び審査結果

口述試問において最初に行われた本人からの内容報告では、目的、動機が最初に示され、各章の概要説明が順を追って適切になされ、その後、主査、第一副査、外部審査委員である第二副査による口述試問が行われた。

質問の多くは、個々の分析に関するものより、論文全体の構成、先行研究のあり方、論の展開および書式などに集中した。主査からは認知言語学の意味に対する考え方についての質問があり、基本的な部分では適切な応答であったが、表現と意味との動機づけられた関係ということが出てこなかった。また使用した言語データ(辞書の語義説明と例文および映画のシナリオ)に偏りがあり、その信頼性に疑義が呈された。

第一副査からは、最初に中島氏の言う認知言語学的アプローチ、認知メカニズムとはどのようなものか、という質問があり、ついで、序論において問題提起がなされていないこと、先行研究検証の不徹底さ、特に日本語の代表的先行研究が取りあげられていないなどの指摘があった。

第二副査からは、言語表現における基盤が身体性であることは、今までの研究ではっきりしているが、では中島氏のこのテーマの何が問題で何を論証しようとしたのかという、論文の根幹に関わる質問が寄せられた。言語データとしてなぜコーパスを使わなかったのか、現代英語の分析にどこまで語源が関与

するのかなどの方法論に対する疑義が呈された。その他、英語で書かれた要旨の不備、認知言語学に対する誤解に起因する説明、分析の不適切さ (e.g. *sit through*) や、個々の語に関する先行研究を十分参照していないなどの指摘があった。

審査委員の以上の質問や指摘に対して、的を射たとは言いがたい答弁や自説を繰り返すところもあったが、全体としては、真摯な受け答えであった。

論文の基本的事項の不備や論証の仕方の不十分さはあるものの、本論文の評価できる点は、日英の辞書を丹念に読み、実例として英語のシナリオを詳細に分析することにより、個々の語句の分析には、着眼点の良さや従来なかった指摘や表現の発掘が見られることである。たとえば、「両手を上げろ」を意味する “Reach!” や「証言台に座る」を意味する *sit up* は従来 of 辞書に記載がない表現であり、特に後者 *sit up* に関しては *stand down* との対比において巧みな説明が行われている。

上述したように本論文は幾つかの問題点や不備を含んでおり、これらに関しては今後の修正を求めることを条件に、審査委員会は、本論文を博士（言語文化学）の学位に値するものと認定する。

以上